

時評

佐藤洋一郎

総合地球環境学
研究所副所長・教授



ユッケによる集団食中毒が起きた。幼い子どもの生命がまた奪われた。痛ましいことである。ここ何年かのあいにく事故によって、この国の食の安全は完全に失墜した感がある。言わずもがなだが、自分の生命は自分で守らなければならない時代が来ようとしているかのようだ。

こと食については、行政も、企業も、だれも信用できない。しかし嘆くことはない。人間は大昔から、自分の生命は自分で守ってきたのだから。食品の製造や貯蔵、運搬などの方法に行政が介入し、消費者保護が図られるようになったのはごく最近のことには過ぎない。それまでの時代、食の安全は完全に自己責任の世界だったのである。

ユッケ用生肉の集団食中毒

今回の集団食中毒の話を知ったとき、私は叔母に連れられて列車で里帰りしたときのことを思い出した。夏の暑い日だったことを鮮明に記憶している。駅でアイスクリームをねだったところ、いつもは優しい叔母がその日ばかりは頑として聞き入れてくれなかった。それで記憶が鮮明なのが、後になって叔母

安さ、安全の認識改めたい

安全はタダでいうことである。

は、「冷たいものを食べさせておなかをこわしたら申し訳ないと思った」と幾度も弁明した。当時はまだ衛生管理が不十分で、冷たいものは危ないという認識があったのだと思う。冷たいものや生ものが危ないという事情は、今も何も変わっていない。火を通すことで、どれだけの人命が救われただろうか。今は技術の発達で食品の衛生状態はずいぶんよくなったが、それでも生肉は、たとえ適切に処置しても、絶対安全とは思えない。何かの拍子で病原菌が付着すれば、感染はまぬがれない。大人なら、あるいは長じてかからず、免疫力はじめ抵抗力もある。自分で判断することもできる。しかし、抵抗力も体力も言っまでもなく出す側の責任は当然大きい。危険度の低い生肉など、いつも手に入るものではないだろう。運よく手に入った時は、常連など気心の知れた客だけにそっと出す、というのが昔のやり方だった。今回のユッケの場合、安い値段で大量に出していたようだ。だが、安い、ということはどこかにしわ寄せが行っているところである。安全はタダではない。安い分、何かが犠牲にされているはずだ。そして今回は、安全が犠牲にされたのだ。最近では経済が緊縮する中、とにかく安いことが金科玉条のように言われる。安くて何が悪いかというと、意見もあつちが、食にかつては、この考えはそろそろ改めた方がよい。何かことが起きてからでは、遅いのである。

執筆経歴

◇さとう・よういちろう氏 京都大学大学院農学研究科修士課程修了。静岡大助教授を経て2008年10月から現職。植物遺伝学専攻。著書に「稲の日本史」(角川書店)「コシヒカリより美味しい米」(朝日新書)など。